ござりませぬが、幽には、御覺えがあらうも知れませぬ、……元數寄屋町の中程の
もし、へゝゝ、煎餅屋の、はい、其の時分からの爺でござりますよ。」
「あら、お店の前の袖垣に、朝顏の咲いた、撫子の綺麗だつた、千草煎餅の、知つ
て居ますとも――――まあ、お見それ申して濟まないことねえ。」
はづんだ聲も夜どゝもに沈んで聞えて靜である。
「滅相な、何の貴女。お忘れ下さるのが功德でござりますよ、はい、でも私は粗と
お見覺え申して居ります、たしか……瀧の家さんのお妹御……。」
「えゝ、小女い方よ、お爺さん、こんなに成つて……お可懷いのね。」



## 四十三

「御主婦さんは、」

「養母ですか。息災ですよ。でも、めつきり弱りました。」
「私、蔭ながら承つて存じて居ります。姉さんが、お亡くなりに成りましたさう
で。あの方はお丈夫で。……貴女はお小い時から惡戲もなさらず、何時もお弱くつ
ておいでなさりましたが、然かし、まあ、御機嫌よう、御全盛で。」
「否、全盛處ではござんせん。姉が達者で居てくれますと、養母も力に成るんです
けど、私がこんなですからね。――何ですよ、何時も身體が弱くつて困りますの。」
「お見受け申しました處でも、些と蒲柳なさり過ぎますて。」
何やら、もの思はしげな清葉の容子を、最う一度凝めて視て、
「最も柳に雪折なし、却つて御心配の無いものでござります。でござりますが。」
爺さんは天秤を潛るが如く、腰を極めて、一息寄る。
「其のお弱い貴女が、又……何で、今時分、こんな處に夜風は毒の、橋は冷えます

私なんぞ出過ぎましたやうでござりますが、お案じ申すのでございますよ。」
「難有う、……身投げぢやないの、お爺さん。」
「滅法界な、はッはッ。」
「でも、眞個は投げても可いんです、今夜あたり。」と微笑んだ、が、笑顔の氣高いのが凄いやうに見える。
「滅相至極も無い。」
「眞味に心配して下さるのを私、串戲を云つて濟みません。眞個身でも投げさうにそれは見えましたでせうとも。一人で、こんな處に茫乎して。
實はね、お爺さん、宵から御目に掛つて居た客が、歸りがけに此の橋から放生會をなすつた品があるんです。――昨日はお雛樣のお節句だわね――其の蛤と榮螺ですつて。」



「はい、成程。」
「殿方ばかりでなさるんでは、故とらしくも聞えますが、其の方は御姉さんの御遺言。……まあね、……遺言と云つた譯なんですとさ、私も姉が亡く成つたんです。何ですか、可懷くつて、身に染みて成らないのに、少々仔細が有りましてね、最う其の方とも此切、お目に掛られないかも知れなく成つたの。七年以來、夢にまで眞個に夢を見て頂くまで、最負に……思つて……下すつた……のに。」
袖を落して悄るゝ手に、鐵の欄干は痛々しい。
「私……最う御別離をお見送り申し旁々、切めて、此の橋まで一所に來て、優しい事を二人でして、活きものゝ喜ぶのを見たかつたんですけれども、二人ばかりの朧夜は、軒續きを歩行くのさへ謹まねば成らないやうに、もう久しい間……私ねえ、躾げられて居るもんですから、情ないのよ。お爺さん。お恥かしいぢやありません

か。其のね、(二人で來る。)と云ふのさへ思出さねば氣が着かない迄、好な事、嬉しい事、床しい事も忘れて居て、……お暇乞をしたあとで、何だか頻に物たりなくつて、三絃を前に、懷手で熟と俯向いて居る中に、漸つと考へ出したほどなんですもの。

私許でも、眞似事の節句をします。其の榮螺だの蛤だのは、何うしたらうと、何年越かで、ふゞと、其も思出すと、……屹と何かと突包んで一所に食べたに違ひない。菱餅も燒くのを知つて、其が草色でも、白でも、紅色でも、色の選好みは忘れて居る、……あゝ、何と云ふ空蟬の女に成つたらう、と胸が一杯に成つたんですよ。」

## 四十四

「お地藏樣の緣日だし、序と云つては失禮だけれど、其方と御一所に、お參詣をしながら、貝を流しに來られたら、何んなに嬉しかつたらうと思ひますとね、……それなり內へ歸る氣に成れなかつたもんですから、後を慕つたやうに見に來ました。

お爺さん、其の方は、隨分、私に思切つた、殿方の口からでは、嘸ぞ仰有りにくからうと思ふ事さへ、打明けて下すつたのに、私は女で、女の口から言つて可い、言はねばならない……今、唯、お前さんに話をした、一所に此處までお見送りがしたい、と其れだけさへ、口へは出せない身なんですもの。

大抵お察しなさいまし。……小兒のやうな罪の無い、そして其より、酢いも甘いもよう知つて、浮世を悟つたお老人は佛樣、何にも隱す事は無い。……私には、小兒の親の旦那があります。

何うせ女房さんや兒があつて、浮氣をなさるくらゐな人。妾てかけは他にもある珍らしくも無い私を、若い妓に見かへないで瀧の家一軒所帶の世話をしてくれます

のは、棄てる言分が無いからです。落度があれば其切、まことに頃日の樣子では、内々ぢや持扱つて、私の落度を捜して居るかも知れませんもの。大一座でゞもあるなら知らず、差向ひでは、串戯も思切つては言へませんわ。

那樣に、だらしなく意氣地なく、色戀も、情も首尾も忘れたやうな空洞に成つたも、燃立つ心を冷し〳〵、家を大事と思ふばかり。其の家だつて私のぢやない。……

……

ねえ、お爺さん。」

と面を背けて、

「養母へ義理たつた一つばかりなのよ！……

亡く成つた姉に、生命がけの情人が有つて、火水の中でも添はねば成らない、けれど、借金のために身拔けが出來ず――以前盗人が居直つて、白刃を胸へ突きつけ



た時、小夜着を被せて私を庇つて、びくともしなかつた姉さんが、義理に堰かれて逢ふことさへ出來ない辛さに、私を抱いてほろ〳〵泣く。

出生は私、東京でも、靜岡で七つまで育つたから、田舍ものと言はれやうけれど……其の姉さんを持つたお庇に、意地も、張も、達引も、私は習つて知つて居る。

其の時に覺悟をして、可厭で可厭で成らなかつた、旦那の自由に成つたんです。又然うして、後々までも引受ければ、養母が承知をして、姉を手放してくれたんですもの。……

ちやんと養母に約束した、其の時の義理がありますから、自分ぢや、生命も隨意には成りやしない。

お爺さん、私や藝者のかざかみにも置かれない……意氣な人には御守殿だ、……奥さんだ、お部屋だつて言はれます。」

はなじろみながら眉の昂つた、清葉の聲は凛とした。……途中でお孝の三人づれに行逢つたを爺は知るまい。が、言ふ清葉より聞く方が、ものをも言はず、鼻をすゝる。

「心に思ふ萬分一、其の一言は云はないでも、姉の身ぬけに恁う〳〵と、今云つた義理だけは、私は其の人に言ひたかつた、言ひたかつたんです。」

と思はず縋つて泣くやうに、聲が迫つて、

一ですけれど、他人は知らず、私たち、然うした人に、此の事を打明けては、死んだ姉に恩を被せる、と乘つてる蓮の臺が裂ける……姉は私に泣いてませう、泣いてくれるのは嬉しいけれど、氣の毒がられては、私は濟まない。

坊主に成る、とまで眞實に愚に返つて、小兒のやうに言つた人に、……私は堪へて默つて居ました。……」



## 彩ある雲

### 四十五(一)

爺さんは、前刻打撲された時怪飛んだ、泥も拂はない手拭で、目を拭くと、はッと染みるので、驚いて慌しいまで引擦つて、

「他所目には大所の御新姐さんのやうに見えます、其の貴女が、……矢張り苦界、孰れ苦の娑婆でござります。それにつけましても孫が可愛うございますので、はい。」

沈めて、靜に、

「お孫さん？……」

「えゝ、女の子でございまして。」

「まあ、私は些とも知りません。」
「御最でござりますとも。　未だ胎内に居ります内に、唯今の場末へ引込みましてな。」
「では、私の静岡と同じだわね、それは、まあ、お樂み。」
「否、處が何うして、處が何うして。」
と頭を掉つて、下ろして有る天秤に掴まりながら、
「大苦みなわけでござりまして、貴女方と同一と申すと口幅つたい、其の數でもございませんが、……稲葉家さんに、お世話に成つて居りますので、はい。」
「おゝ、お孝さんの許に、……些とも私知らなかつた。」
「はい、彼方の姉さんも、あの御氣象で、よく可愛がつて下さいます、が、願へまものならば、貴方のお手許に、と其の時も思つた事でございます。否、不足を言



ふではございません。藝者と一概に口では云ひ條、貴女は、それこそ歴乎とした奥方様も同じ事。一人の旦那様にちやんと操をお守りなされば、こりや天下一本筋の正しい道をお通りなさる、女の手本でございます。彼娘にもな、あやからせたう存じますので。」
「飛でもない、お孝さんこそ可い姉さん。あゝでなくては不可ません。私は何も、曲んだり拗ねたりして、恁う云ふのではないんです。お爺さん、色でも戀でも無い人に、立てる操は操でないのよ。……一人に買はれる玩弄品です。大人の手に遊ばれる姉さま人形も同じ事。」
ふと言絶え、嘆息して、
「此處で榮螺を放した方は、上の壇に榮螺が乘つて、下に横にして供へられた左褄の人形を、私とは御存じないの。」

と、半ば亂れた獨言、聞かせぬつもりの聲が曇る。

「何も浮世でございますよ。」

と分らぬながら身に詰まされて、爺さんはがつくりと蹲んで俯向き、もう一度目を引擦つて、

「何の眞似は出來ませいでも、切めて藝ごとで、勤まるやうに成れば可いと存じますよ。貴女なぞは何が何でも、其處が强味で入らつしやいます。憂さも辛さも、絲に掛けて唄つてお了ひなさりまし。藝ごとも貴女ぐらゐにお成りなさると、人の樂みより御自分のお氣晴しに成りまする。……中にも笛は御名譽で、お十二三の頃でございましたらうか、お二階でなさいますのが、私ども一町隣、横町裏道寂と成つて、高い山から谷底に響くやうでございましたよ。」

「ピイ〳〵笛の麥藁ですかえ、……あんな事を。」とむら雲一重、薄衣の晴れたやう



に、嬉しさうに打微笑む、月の眉の氣高さよ。

「あの、時分の事を思ひますと、夢のやうでございます。此の頃でも、御近處だと時々聞かれますのでございませうがな。」

「可鹽梅。」

とやゝ元氣に、

「幸と聞えやしませんよ。……でも笛だけは、もう何時も、帶につけて居ますけれども、箱部屋の隅へ密として置くばかり。七年にも八年にも望まれた事はありません。世間ぢや誰も知らないのに、お爺さん、ひよんな事を言出して、何だか胸があつく成つた。笛が動いて胸先へ！　……嬰兒のやうに乳に響く！　何時でも口を結へられて、袋に入つて居るんだから。」

と命を抱く羽織の下に、屹つと手を掛けた女の心は、錦の綾に、緋總の紐、身に

引きしめた朧の顔に、彩ある雲が、颯と通る。

眉を照らして、打仰ぎ、

「……世に出て月が見たいんでせう。……吹きはしませんよ。」

とすらりと抜いて、衝と欄干へ姿を斜めに、指白々と口に取る。

あゝ、七年の昔を今に、君が口紅流れしあたり。風も、貝寄せに、をくれ毛をはら〳〵と水が戰ぐと、沈んだ榮螺の影も浮いて、青く澄むまで月が晴れた。と、西河岸橋、日本橋、吳服橋、鍛冶橋、數寄屋橋、松の姿の常盤橋、雲の上なる一つ橋。二十の橋は一齊に面影を霞に映す、橋の名所の橋の上。九百九十九の電燈の、大路小路に殘つたのが、星を散らして玉を飾つて、其の横笛を鏤むる。

清葉は欄干に上々しい。

甚平は手拭を鷲掴みで、思はず肩を聳かした。



「吹奏まし、〳〵。何の貴方、誰、誰が咎めるもので。こんな時。……不忍の池あたりでお聞き遊ばすばかりでございます。」

「勿體ないこと。……」

と笛を袖へ、又うつむいて悄れたのである。

河童の時計の蒼い浪、幽な水音。どぶりと一つ、……一時であらう。

## 鷲

### 四十五(二)

稲葉家のお孝は冷く成つた、有合はせの猪口を呼吸つぎに呷、と一口。……で、薄ら寒いか兩袖を身震ひして引合はせたが、肩が裂けるか、と振舞は激しく、風采は華奢に見えた。

が、すつきりと笑ひながら、

「それぢや、清葉さんばかり縹緻がよくつて、貴方は、だらしが無いんだわね。」

「先あ、然うなんだ。」と葛木は、打傾いて頬に手を置く。

「先あぢや無いぢやありませんか。立派に斷られたに違ひない。」

「そりや違ひない。」

「振られたのね。」

「ふられました。」

「ポーンと。」

「何も、然うまで凹ますには當るまい。」

「嬉しいねえ。」

小兒らしいまで胸を搖つた、が、何故か氣が立つて胸の騷ぐのを、然うして紛ら



したやうである。

葛木は、煙草の喫さしを火鉢に棄てた。

「其だがね……」

「未だ負惜み？」

「唯話さ。」

と苦笑して、

「別れに獻した盃を、清葉が、些と仰向くやうに天井に目を閉いで飲んだ時、世間が最う三分間、もの音を立てないで、死んで居て欲しかつた。私の胸が、此の心が、何う成るか其が試して見たかつたが、ドシンばたん、と云ふ足音。隣室の醉客が總立ちに成つて、寢るんだ、座敷は、なんて喚いて、留める藝者と折重つて、此方の襖へばた〳〵と當る。何を、と云つてね、其の勢で、あー……開けるぞ、と思ふと、清

葉が、膝を支直して、少し反身で、ぴたりと壓へて、(お客様です。)

然う、屹として言つたんだよ。(誰だ。)と怒鳴ると(清葉がお附き申して居りますと手に觸つた撥を握つて、すつと立つた——藝妓のひそめく聲がして、がたがたと其處らが鳴つて靜まつたがね、……私は何だか嬉しかつたよ。」

「情人らしく扱はれたやうな氣がして？　そんな負惜みをお言ひなさんなよ。」輕く卓子臺を掌で當てゝ、

「卑怯な、男のやうでもない。」

「否、そんな意味ぢや決して無いんだ。恥を秘して貰つたやうでさ。不出來をして女に振られた、戀の奴の、醜體を人目から包んでくれた氣がしたから。」

「人目が何うして、そんな事ぐらゐ藝者が貴下。もしか其が旦那だつたら、清葉さんは何うするだらう。……一寸。此處へ、もしか私の男が、出刀庖丁か拔身でも持



つて蒼く成つて飛込んだら、私が何うすると、貴下思つてるの？　否、吃驚する事は無い。私だつて其のくらゐな覺悟はして居る。

大丈夫、然うすりや貴下の上へ、屏風に倒れて背に成つて、私が突かれる、斬られて上げるわ。何の、嫉妬の刀物三昧、切尖が胸から背まで突通るもんですか。一人殺さしる內には貴下は助かる。兩方遁げるから危いんだわ。ねえ、一寸、」

と、じり〳〵と膝で寄つて來たが、目が覺めたやうに座を眴し、

「あら、何の話をしたんだらう、……あゝ、然う然う。」

お孝は何氣なく頷いて、

「清葉さんがお庇ひ遊ばして——まことに、お豪い藝者衆で居らつしやいます。」

「眞個、私は、しかし、」

「しかし何うしたのさ。」

「姉に、姉の袖で抱かれた氣がした。」
「葛木さん。」
其のまゝ衝と膝を掛ける、と驚いて背後へ手を支く、葛木の痩せた背に、片袖當て丶裳を投げて、
「そんなに姉さんが戀しいの。人形のお話は、私も聞いて泣いて居ました。眞個に貴下、そんなぢや情婦は出來ない。口説くのは下拙だし、お金子は無さゝうだし、」
「謝罪る。」
「口説かれるのも下拙だし、氣は利かないし、拔は合はず、機會は知らず、言ふ事は拙し、意氣地は無し、」
「堪忍し給へ。」
「から、だらしは無いけれど、たゞ一つ感心なのは惚れる事。お前さん、惚れ方は



巧いのね。」
「……」
「情婦が無くつて、寂しくつて、行方の知れない姉さんを尋ねるッてさ、坊主になんか成らないやうに、私が姉さんに成つて上げませう。」
「……」
「御不足？　清葉さんでなくつては。」
「那……那樣事は。……あゝ、息が塞るよ。」
「死んでお了ひよ。こんな男は國土の費だ。」
「酷い。」
と云ふ時、とんと突飛ばして、すつくり立つ、と手足を殘して燃ゆるやうに見えた。パチンと電燈を消したのである。

力の籠つた、情の聲。
「一寸、(サの字。)が見えなくつて？　サの字よ、私、葛木さん。」
「お孝さん。」
と僅に言ふ。
「暗い中でも、姉さんに見えませんか、姉さんにしてくれませんか。自惚れて丶？
一寸自惚だ、と思ひますか。清葉さんでなくつては——不可いの、下可いの。」
「眞暗だ。私は、眞暗だ。……」
「まだ、まだ〳〵あんな事を。清葉さんでなくつちや、不可いの、不可いかい。」
「顔が見たい、お孝さん。」
「贅澤だよう。」
と婀娜な聲。暗中に留南奇がはつと立つ。衣摺の音する〳〵と、零時して、隔て



の襖に密と手を掛けた、ひらめく稻妻、輝く白金、きらりと指環の小蛇を射る。
眞個の、貴方の姉さんは私は知らない。清葉さんなら恐れはしない。藝で行けなきや、容色で、……容色で行けなけりや藝事で、皆不可なけりや、氣で負けないわ生命で勝つ。葛木さん、見て頂戴。」
とすらりと開ける、と翠の草に花の影を敷いて、霞に鴛鴦の翼が漾ふ。
「あ丶、お千世は？」
と葛木が言つた、其は影も見えなんだ。
「枕を持つて、下階の女房の中へ寢に行きました、……一度でも藝者と遊んで、其のくらゐな事が分らない。——さあ、ちやんとして見て頂戴。サの字が見えない？姉さんに肖ない？……え丶、焦つたい。」
と襖に縋つて、暗い方へ退る男と、明く浮いた枕を見交はす。

「姉さんで可愛がられるのに不足なら、妹にまけて可愛がられて上げませう。從姉妹に成つてなかよくしませう。許嫁でも、夫婦でも、情婦でも、私、まけるわ。サの字だから。鬼にでも、魔にでも、蛇體にでも、何にでも成つて見せてよ、藝人ですもの。」

と裳を搖つて拗ねたやうに云ひながら、ふと、床の間の櫻を見た時、醉つた肩はぐたりとしながら、キリ、と腰帶が、端正と締る。

「何の、姉妹に成るくらゐ、皮肉な踊よりやさしい筈だ。」

掻卷の裾を渚の如く、電燈に爪足白く、流れて通つて、花活の其の櫻の一枝、舞の構へに手に取ると、ひらりと直つて、袖にうけつゝ、一呼吸籠めた心の響、花ゆら〳〵と胸へ取る。姉の記念に豈劣るべき花柳の名取の上手が、思のさす手を開きしぞや。



其の枝ながら、袖を敷いた、花の霞を裳に包んで、夢の色濃き蒲黃の水に、鴛鴦の翼に肩を浮かせて、向ふむきに潰島田。玉の緒搖ぐ手柄の色。

「葛木さん。」

「……」

「人形が寂しい事よ。」

## 生理學教室

### 四十六

お孝は黑襦子の襟、雪の膚、冷たさうな寢衣の裝で、裾を曳いて、階子段をすると下りると、其處に店前の三和土に蠱乎と立つた巡査に、一寸目禮をして、長火鉢の横手の扉を、すつと緣側へ出て行く。

其處が中庭に成る、錦木の影の淺い濡縁で、合歡の花をほんのりと、一輪立膝の口に含むだのは、五月初の遲い日に、じだらくに使ふ房楊子である。

其の背後に、座敷が見えて、花は庭よりも其處に咲いて眉の緣の年增も変る。

唯、下地子らしい十二三なのが、金盥を置いて引返して來て、長火鉢の傍の腰窓をカタンと閉めたので、お孝の姿は見えなく成つた。

とばかりで、三和土に立つた警官は、お孝が降りて來た階子段を斜に睨んで、髯を捻る事專なり。で、少時家中が寂然する。

一體、不斷は千本格子を境にして、やけな奥女中の花見ぐらゐ陽氣な處へ、巡査と見ると騷動が豪い。謹むのでは無い笑ふので、キャッ〳〵クッ〳〵、各自が彼方此方、中には奥へ驅込むで轉がるまで、胡蝶と鸚鵡が笑ふ怪物屋敷の奇觀を呈する。



事の起因を按ずるに、去年秋雨の降くらす、奥の座敷に、女ばかり總勢九人、然も二組に成つて御法度の花骨牌。軒の玉水しと〳〵と鳴る時、格子戸がらり。

「御免。」と掛けた聲が可恐く嚴い蠻音。薩摩訛に、あれえ、と云ふと、飛上るやらくる〳〵舞ふやら、平胡と坐つて動けぬやら。

座敷では袂へ忍ばす金緣の度裝の硝子を光々さした、千鳥と云ふ、……女學生あがりで稻葉家第一の口上言が、廂髪の阿古屋と云ふ覺悟をして度胸を据ゑて腰を据ゑて、最一つ近視眼を据ゑて、框へ出て、はッと惡く落着いた切口上。

「別に其のでございます。相變りました事はございませんです。」と戸籍係に立ごかしの三ッ指を極めたと思へ。

「羅宇が出來たけえ、……持つて來たですッ」。

「何だね、羅宇屋さん、裏へお廻り。」と婆やが水口の障子で怒鳴ると、白磨竹を突

着けられた千鳥の前は、拷問の割竹で、胸を抉られた體にぐなりとした。

鍋燒饂飩は江戸兒で無い、多くは信州の山男と聞く。……鹿兒島の猛者が羅宇の篏替は無い圖でない。然も着て居たのが巡査の古服、――家鳴震動大笑。

以來、戸籍檢べ、とさへ言へば、食ひかけた箸を持つて刎廻る埒の無さ。當區域受持の警官も、稻葉家では（笑ふ。）と極めて、其の氣で髯を捻るのであつたが。

今日のは大に勝手が違つた。

「姉さんは内ぢやらうで。」

「はあ、あの……」

「是非、直接に逢ひたいんぢや……取次を賴むです。」

小女が一度、右の千鳥女史と囁き合つて、やがて巡査の顏を見い〳〵、二階に寢て居たのを起した始末。笑ひ掛けたのは半途で壓へ、噴出したのは嚥込んで、いやに靜かな事仍て如件。

幽な咳してお孝が出た。輪曲ねて突込んだ婀娜な達手卷の端ばかり、袖を辷つて着流しの腰も見えないほどしなやかなものである。

「失禮をいたしました。」

「は、あんた覺えて居らるゝかね。」

唐突に言ふのが其で、お孝は一寸分り兼ねつゝ、黃楊の横櫛を壓へたのである。

## 四十七

巡査は掌を向ふへ扱いて、手袋を外づして、片手に絞つて、更めて會釋する。

「一寸分りますまい、ぢやらうがね、……先達つて、三月四日の午後十二時の頃に逢ふたのですが。」

「あゝ、一石橋の、あの時の。」
お孝は輕く傾いて居たのが屹と見直す。
「多日でした、いや、其の節は失敬ちやつた。」
「否、私こそ失禮を。」
「むゝ、聊か其の失禮で無いこともなかつたですね、ひやッ、ひやッ。」と壁に響くが如き力ある笑聲。笑ふのに力が有つて、敢て底意は無さゝうである。
お孝は顔を洗つたばかりの、緣起棚より前へする挨拶とて、いつになく もじ〳〵して、
「つひね、お白酒の持越しで、酔つて居たものですから、ほゝゝ。」
と莟ぐらゐな内端な聲。
「お茶をよ、誰か。」



「然う云ふ心配をされては困る。……官服の手前もある。お宅などで餘り世話に成つては不可んのです。……雖然、一寸此處を拜借します。」
「さあ何うぞ、……貴官お上り遊ばしては。」
「此處で結構です。」
小女が心得て手早く坐蒲團と煙草盆。
「御免下さい。」と外套を抱へたまゝ、ガチリと佩劍の腰を捌いて、框の板に背後むきに、かしッと長靴の腰を掛ける、と帽子を脱いて仰向けにストンと置いて、
「何は、一寸々々來らるゝかね。」と髯を捻る。
「誰方……でございますか。」
「何は、大學の國手は？」
「薩張……」と目が働いて、頰が締る、お孝は注意深い色である。

「全然お見えに成らんですかね。」
「否、時……偶。」と膝で二つばかり掌を輕く合はせる。
「今度お逢ひでしたら、貴方から、私に、托を一つ賴まれて下らんぢやらうかね。」
「はあ、お目に懸りました節は。――ですが、何時またお見えに成りますか。」と瞻らるゝ目を外らして言ふ。
「別に急ぐと云ふ件では無いです。――今名刺を上げます。で、私が職務としては無い。一個人として、私一人として、ぢやね、……非常に先達ては失敬した、詫をします、と貴方から能う然う言うて貰ひたいのぢや。實は其を賴みたうて、今日は私用のみで出向いて來たです。……いや〳〵一石橋の事のみではないです。
實は、今週の金曜日、一昨日でした。私は非番だもんで、醫科大學へ葛木さんを訪問したです。可えですか。……と云ふのはぢやね、先夜、彼の場合、貴方が不意



に出て來られて、私が疑問の的とした不審を實際に示して、證明をされたもんで、其れ以上追究は出來兼る都合で手を放した。
最も孰にせい。私が思ふたほどの事件で無い、とだけは了解したのぢやけれども醫學士などは出たら目ぢやらう。又、あの年配で、それが今日堂々たる最高の學府に氏名を列する一員であらるゝものがぢやね、……學問上、蛙の腸や、モルモットの骨を新聞紙に包んで棄てるならば、幾分かいはれはある。それも必ずしもあるべき事實とは思はんのぢやがね。
榮螺と蛤、姉の志と云うて、雛にそなへたを汐に流す――そんな事が。私は斷じて信ぜんのぢや。」
と今も尙且つ信じないやうに、澁に朱を加へた赤い顏で――信ぜんのぢや！――

巡査は其處に注いで出した茶を、喫まず、じろりと見たばかり。

「事態、私も怪訝に堪へんもんで、早急とは無しに、本郷方面へ、同僚の筋を手繰つて捜りを入れると、葛木晋三と云ふ醫學士は如何にもあるぢやね、而して、其は醫科に勤めて居らるゝが、内科、外科、乃至婦人科、何でも無いのぢや。大學内の其の、生理學教室に居つて研究をされつゝある……」

と眞顏にお孝に打傾いて、左の手の自脈を取りつゝ、

「まるで此の方には關係ない。純粹の其の學者ぢやとある。で、尙ほ怪いですわい其の晩の擧動なり、……あの餘り……貴方の前ぢやけれどもが、風采の上らん、痩せた、薄髯のある、背の屈んだ、恁う、突くとひよろひよろつとしさうな、人に口



を利くにおど〳〵する、初心らしい、易つぽい、容子と云ふのがぢやね、人品備はらんですぢやらうが、何うですかね、……きやッ、きやッ、きやッ。」

空咳きに咳入る如く、肩を搖つて高笑ひをする。

「さあ、」と云つたが、ほゝゝ、とばかり此の際困つたと云ふ片頰笑みをして、一寸指先で疊をこすり狀に、背後を向いて、も一度ほゝゝ、と莞爾すると、腰窓を覗いて居た、島田と銀杏返が、ふつと消える。

巡査は、乃ち髯を捻つて、

「怪しいものではあるまい。後暗い事は、其は無いのぢやらう。がです……あの晩の人間は名を騙つた者に相違無い、と何うしても疑はれて成らんもんで。好奇心にも驅らるゝですわ。非常に思切つて、醫科大學に刺を通じて面會を求めたです。そりや、貴方、通常服で、そして小倉ぢやが袴を着けて出向いたけえな。

何うか思ふたが、取次いだ小使どんが、やゝ暫時あつて引返して、お目に掛らう言はるゝ、通れ、とあつて、廊下傳ひ方角を教はつて、而して其れから歩行き出したがね、――私は先年此岐阜縣下ですわ、飛彈の或山家邊僻に勤務した事があつて深い谷陰、高い崖に煙草の密造をする奴を檢べに行つたのぢやね。其の節、路も無い處を、所謂、木の根巖角です哩。時々藤蔓にぶら下つて激流の空を綱渡などしたが、いや、見當の着かぬ心細い事は、門外漢が學校の其の奥へ行く廊下傳ひは、奥山を歩行く所では無かつたです。

日も西山に沒して前途尚ほ遙なりと云ふ、遠い向ふの峠見たやうな處に、大な扉の戸を、細う開けて、背にして、すつくりと立つて、此方を出迎へて居られた。峯の一本の松と云ふ姿に見えたのが、何と驚いたねえ、あの晩の少い紳士ぢや、國手ぢやつたで。



びたりと留まつて、思はず、擧手の禮を施したですよ。常服では可笑いのぢやが。すぐに此へ、と言はれて、大な扉を入ると、ズシンと閉つたと思はれい。稻妻のやうに、目を射られたのは室一杯に並んだ書架に、ぎつしりと並んだ、獨逸語ぢやらうね、原書の脊皮の金文字ですわ。

暮方の空に、此が何うですか。紺地に金泥の如く、尊い處へ、も一つの室には名も知れない器械が、淨玻璃の鏡のやうに、まるで何です、人間の骨髓を透して、臓腑を射照らすかと思ふ、晃々たる光を放つ。

私は、よろ〳〵と成つたで。あの晩、國手が、私のために、よろ〳〵と成られた如くぢや。何と俗に云ふ餅屋は餅屋ぢや、職務は尊い。」

と沈着に、腕を拱く。

其の器械と書架の有ると、國手兩室を占領して居らるゝ樣子ぢやねえ――傍には寢臺も有つたですよ。柱の電鈴を壓さるゝと、小使どんが紅茶を持つて來るのぢやつた……

私は卓子の向ひに、椅子を勸められて眞四角に掛けたのぢやが、硝子窓から筑波山の夕日が射して、其の生理學教室を燦と輝やかした中に、國手の少い姿が、神々しいまでに見えた。

一應話を聞いたです。私もね、出來得る限り、行政官の一員たる其の威嚴を保つてからに。然し、決して警官として尋問をするではありません。……既に一石橋當夜の紳士と、生理學教室に於ける國手とが同一人である事を確めた上は、些少たりとも犯罪に對して何等其の疑ひは無いのでありますが、お話の如き事が事實有り得るものか何うか、後學の爲め、一種人情に對する警官の經驗の爲に、云うて、其の室で飾ると云はれた、雛を見せて貰うたです。



國手、一個の書架の抽斗、其には小說、傳奇の類が大分帙を揃へて置かれた――中から、金唐革の手箱を二個出して、其を開けると無雜作に、莞爾々々しながら卓子の上に並べられた。一錢雛ぢやね、土人形五個なのです。が、白い手飾の、あの綺麗な手で扱はれると、數千の繰絲を掛けたより、もつと微妙な、纖細な、人間の此の、あらゆる神經が、右の、嚴肅な、緻密な、雄大な、神聖な器械の種々から、清い、涼い、芬と藥の香のする室の空間を顫動させつゝ傳はつて、雛の全身に颯と流込むやうに、其の一個々々が活きて見える……

就中、丈、約七寸許の美しい女の、袖には櫻の枝をのせて一寸、うつむいた、慳

然するやうな、京人形。……髪は、」

と言ひ掛けて、お孝の姿を更めて視て。

「貴方、貴方の其の髪と同一に髪を云ふた人形ぢやがね。」

お孝は俯向いて、しやんと手を支く。

「其は何と云ふ髪の結びかけたですかね。」

「潰……」

「はあ？……何ですかね、覺えて置くで失禮します。」と手帳を出す。

お孝の上げた顏は、颯と瞼が染つたのである。

「あの、潰島田でございます、お人形さんの方は結構でしやうけれども、此はまことに其の潰しの利きませんお恥しいんですよ。」

「否、潰しなんかきかんで可えです。貴方は既に葛木さんの。」



隅の階子段を視て空ざまに髯を扱いた。見よ、下なる壁に、あの羆の毛皮、大なる筒袖の、抱着いた如く膠頽として掛りたるを——

巡査は心着いた目をお孝に返して、

「貴方、大抵の事は、此處で饒舌つて可えですか。或種の談話は憚らんでも構はんですかい。」

「え、、、」

と懐を廣く、一膝出ながら、

「些とも……お氣に入りましたら、私をすぐ、お口説きなすつても構ひませんの。」

「きやッ、、きやッ。葛木さんの奥さん。何ないしてかい？……」

「まあ、そんな事こそ、先方さまが御迷惑です。」

「否、然し、其の積りで出向いて來たで。」
「羽織を。寒い……。そして私にも煙草をおくれな。」

## 美擧

### 五十

「さあ……何の話ぢやつたかね、其處で。」
「貴方、其の潰島田に結つたお人形さんですわ。」
「然やう、……就中、其が、葛木さんの目と一所にぱち〳〵と瞬きするぢやね、——」
——聲を曇らして、姉と云ふ御婦人の事も言はれた——
私は別世間を見たです。異つた宇宙を見たです。新しい世の中を發見して寧ろ驚異の念に打たれた。……吃驚したんぢややね、何の事は無い。



嘗て、其の岐阜縣の僻土、邊鄙に居た頃ぢやつたね。三國峠を越す時です。只今、狼に食はれたと云ふ女の檢察をしたがね、……薄暮です。日歸りに山家から麓の里へ通ふ機織の女工が七人づれ、可ですか。……峠を最う一息で越さうと云ふ時、下駄の端緒が切れて、一足後れた女が一人キャッと云ふ。先へ立つた連の六人が、ひよいと見ると、手にも足にも十四五疋の、狼で蔽被さつた。——身體はまるで蜂の巣です哩。

私は反對の方から上りかゝつたんでね。峠から駈下りて來た郵便脚夫が一人、(旦那、女が狼に食はれて居ります)。と云ひ棄てゝ、すた〳〵行きをる。——あとで、其奴顏を覺えとつたで、(何故通りかゝつて助けんかい。)……叱つた處で、在鄕軍人でも無し仕方が無い。然う云ふ事も現在見た。

又、山の中に、山猫と云ふのが居る、姿は嘗て見せん。見るものは無いと云ふで

す。唯深更に及んで其の啼聲ぢやね、此を聞くと百獸悉く聲を潜むる。鳥が塒で騒ぐ。昔の狒々ぢやと云ふ。非常に淫猥な獸ぢやさうでね、下宿した百姓の娘などは、其の聲を聞くと震へるです哩、――現在私も、其は知つてる。

炭燒の奴が、女を燒いて食つた事件もある。

然う云ふ事は知つてるが、趣味と情愛の見聞が少かつたゝめぢやらうか、醫學士が生理學教室で、雛を祭る、と云ふは信じなかつた。――吹く風はなこその關と思へどもですわ。」

と嘆息して、髯に掛けた指を忘れた。

「鎧の袖に櫻のちら〳〵とかゝると云ふ趣も、私の其の了見では嘘にせねば成らんのぢやつけえ。

耻入るです――一個人としてぢやが。」



巡査は、づるりと靴をづらして、佩劍の鞘手に居直つたのである。

「で、國手に大に謝さうと思ふ處へ、五六人、學生とは覺えない、年配の、堂々たる同僚らしいのが、一齊に入つてござつたで、機を考へて、其れなりに歸つたです。

此の意をぢやね、願はくば貴方から國手にお傳へのほどを偏に希望します。私は職務上の過失であらば責を負ふです。其は別問題として、――私は、貴方から御挨拶を願ふのが、最も其の道を得たものと信ずるのぢや。

就てはです。私は沒分曉漢の一巡査であるが、生理學教室に雛を祭ることに於て一石橋の朧月一片の情趣を會得した甲斐に、緋縅の鎧の袖に山櫻の意氣の羨しさに堪へんで。

十年勤務の間、唯一の美擧として、貴方に差上げたいものがある。

……奥さん。」

「……」

「言うても構ひませんな、奥さん。」

「嬉しいんでせたん。」

と聲が迫つて、涙が美しく輝いた。

「一生に一度ですわ。」

「葛木の奥さん、……學位年齢姓名と並べて、(同じく妻。)と認めた手帳の一枚ですお受取り下さい。」

出すのを取つて、熟と俯向く、……潰島田の、水淺黄の手柄のはらはらと搖るゝを祝ながら、冷めた茶碗を不器用な手つきで、取つて陰氣に一口、かぶりと呑むと、ガチリと立つて擧手した切、たゞの巡査に成つて格子を出た。



此の巡査が、本郷を訪問した時の光景は、彼が爰に物語たつた通りであつた。それさへ、神境に白き菊に水ある如き言ふべからざる科學の威嚴と情緒の幽玄に打たれたのに――やがて仔細有つて、此の日の午後、赤熊の毛皮を其のまゝ、爪を磨ぎ、牙を嚙んで、喘ぐ猛獸の如くに成つて、生理學教室へ、日本橋から本郷を一飛びに躍り込んだ……海產商會の五十嵐傳吾は、それは又思ひの外意氣地の無いものであつた。――

大學の廊下を人立して、のさ〳〵と推寄せた傳吾が、小使に導かれて、生理學教室の扉に臨んだ時、呀、戀の敵の葛木は、籐の肱つき椅子に柔く腕を投げて、仰向けに長く成つて、寢ながら卷莨を喫んで居た。……が、客來る、と無雜作に身を起して、カタリと大床に靴を据ゑた。其の音さへ、谺するまで、高い天井。大空に科學の神あつて彼を守護する如くであるのに、搗て加へた學友が五人の數、彼を取卷

いて、恰も迷宮の奇き灰色の柱の如く、すく〳〵と居合はせたのが、希有な侵人者を見ると、一齊に傳吾に瞳を向けた。知らずや、其の中に一人外科の俊才で、渾名を梟と云ふ……顔が似たのではない。いかもの食の大腕泊、嘗て御殿山の梟を生捕つて、雑巾に包んで、暖爐にくべて丸蒸を試みてから名が響く。猫を刻んでおしやます鍋、モルモットの附燒、聊か苦いのは試驗用の蛙の油揚だと云ふ、古今の豪傑、千場彦七君が眞黑な服を着けて、高い鼻に、度の强いぎら〳〵と輝く眼で、ござんなれ、好下品、羆の皮をじろりと視て、頭から鹽を附けたさうにニヤリと笑つた。此の威にや恐れけむ。

傳吾は扉の敷居口に、へた〳〵と腰を拔くと、羆の筒袖の前脚めいた奴を、もさりと支いて、土下座して、

「途惑をいたしまして。」



とばかり、口も利き得ず、すご〳〵と逡巡して歸つたのである。

仔細は云ふまでもない。……大概樣子でも知れやう。前夜から、稻葉家へ泊り込むだのが、其の二階を去らず、お孝に愛想づかしをされて突出されたのであつた。

却説……巡査が格子戸を出ると、やがて××署在勤笠原信八郎とある名刺にのせた、(同妻。)を熟と視て居た、稻葉家のお孝は、片手の長煙管をぱたりと落して、すつと立つと、頂いて長火鉢の向ふ正面なる、朝燈明の清く輝く、緣起棚の端に上ぼせた、が、默つて伏拜んで、坐蒲團に居直つた時、眉を上げつゝ流盼に、壁なる羆の毛皮を見た。

「千世ちやんは？」

煙草盆を引きながら少女が、

「お稽古ですの。」

「春子さん、夏子さん、千鳥さん、萩代さん、居なさるかい。皆一寸來ておくれと然うお言ひ。……私、話したい事がある。」

怨靈比羅

五十一

――「露地の細道、駒下駄で。」――

カタ〳〵と鳴る吾妻下駄、お竹藏向の露地を、突袖して我家へ皈る、お孝の褄は、幻の夜が深かつた。

「姉さん、姉さん。」

と呼ぶ、可愛い聲。

一時、藝者の數が有餘つたゝめ、隣家の平屋を出城にして、桔梗、苅萱、女郎花



垣の結目も玉章で、亂杙逆茂木取廻はし、本城の欄の青簾は、枝葉の繁る二階を見せたが、近頃いはれあつて所帶を詰めて、稻荷樣向ふの一軒につゞめたので、隣家は恰も空屋である。

其處まで戻ると、我家の格子戸前の木戸を細めに開けて、差覗く島田を見た。

「千世ちやんかい。」

お孝は、づゝと來て、年上の女の落着いた聲を沈めて、

「何うおしなの、お前さん最う寢て居たんぢやないのかい。」

「えゝ、寢て居たんですけれど、私、國手がお歸んなさるのを、姉さんが送つて出て、此の木戸で、何だか話して居らつしやるのが寂しく聞こえて、知つて居たんですよ。カタ〳〵と足音がして出ておいでなさいますから、あの、ぢや露地口までお送りなすつたんだ、然う思つて居ましたけれど、それにしては餘り遲いんですもの。

何時までも、お歸んなさいませんし、それだし、あの、一度お寢つたんですから、姉さんは寢衣でせうのに、何うなすつた知ら。……私、心配で……此處まで起きて來て、あの、通へ出て見やうと思つたんですけれど、可恐いでせう。……それですから、あの、此處につかまつて震へて居ましたの。」

「何だねえ、そんな弱蟲が、それぢや、來てくれたつて何にも成りやしないぢやないか。」

と口では笑ひながら、嬉しい目で。其の癖もの案じの眉が顰む。……軒の柳に靄の有る、瓦斯ほの暗き五月闇。淺黄の襟に頰白う、……又雨催の五位鷺が啼くのに内へも入らずお孝は行む。

「何うかしたの、姉さん。」

「否、何うも爲やしないがね、私ね、何うしやうかと思つて居るんだよ。千世ちや



ん、一寸此處へ來て御覽。」

「はあ。」と、お千世は何の氣なし、木戸を内へギイと引く。

「靜によ、誰か目を覺すと面倒だから。」

「あい……何、姉さん。」

「一寸、木戸の此の柱に、こんなものが貼つて有るだらう。」

お千世は、薄氣味惡さうに、お孝の袂に掴まりながら、直ぐ目の前なを爪立つて覗くやうに、唯見ると、比羅紙の、凡そ二枚凧ぐらゐな大きさの眞中にぽつり〳〵と筆太に、南無阿彌陀佛、と書いたのが、じめ〳〵として、宛然、水から這上つた流灌頂の如く朦朧として陰氣に見える。

「可厭、姉さん、何？　一寸。」

お千世は息を切つて震へ聲。

「性が知れてるから些とも氣味の惡いことは無いんだよ。
お聞き、前刻、國手が來なさりがけに、露地口を入らうとして、偶と、そら、其處の松家さんの羽目板を見なさるとね、此の紙が、恰度入口の取着きの處に貼りつけて有つたとさ。
卷煙草を買ふのだつけ、と其の拍子に氣が着いて、表の小母さんの許へ行つたんださうだけれど、最う寢て居たんだつて。
今夜は來やうが遲かつたわねえ。」

## 五十二

「國手はね、それから中通まで買ひに行つたんだとさ。……そしてねえ一本喫かしながら入つて來ると、見たばかりで、最う忘れて居たくらゐだつたのが、又ふつと



氣が着いて、あゝ、此處に有つたつけと、お思ひの、それがお前、前の處には無くつてさ。同じ羽目板だけれども、足數七八つ、二間ばかり奥へ入つた處に、仇白く成つて字が見える。紙が歩行いた勘定だわねえ。」
「姉さん。」
「可恐くは無いんだッてばさ、此の娘は。」
とお千世の肩を抱込んで、
「何かお禁厭でゞもあるかいッて、國手がね、内で私にお話しなの。……何でしやう、月日も、堂寺も記いて無ければ、お開帳の廣告でもなからうし、別に、そんなお禁厭が有るッてことも聞きません。變ですね、……然う云つて居たんだがね。
お歸りなさるのを、框まで見送つた時、私何だか氣に成つてね、行つて見ませうよッて、下駄を突掛けて出やうとすると、(お止し、密と那樣ものを貼つて置いて、

それを見たものに、肺病か何か當の病人から譲渡して、荷を下さうなんのつて、よくあるこつた。……お前は女だから神經を起すと不可い、私は工面の悪い藪のかはりにや、大地震の前兆だつて細露地を抜けるのは氣に成らないから。)

串戯半分然う言つて、國手は平氣なんだけれどもね。もしか禁厭なら何うしやう(貴方は擔がないでも、荷を見せて可いもんですかつてさ、災難なら切て半分、私が背負ひませうよ。)とばたすた急いで格子をついて出ると、お前何んだらう……

そら此處へ來て居るのさ。

羽目を傳はつて木戸へおいでなすつたんだわ。私も慄然と總毛だつた。

はてな、字が殖えて妙な事が書いてある。前刻見たのは念佛ばかりで、こんなものは無かつたつて、御覽。」

と云ふ、南無阿彌陀佛の兩傍に、あひ〳〵傘の樂書のやうに、(となへろ〳〵〳〵



となへろ、)と蛞蝓の如くのたくり廻る。

「國手がね、(何だ、淨土か眞宗にも、救世軍が出來たんぢやないか。)つて笑つたけれどね、……私はドキリとしたんだよ。假名の形を一目見ると分つた。お念佛を(唱へろ〳〵。)――覺悟をしろ――ッて謎ぢや無いか。こりや、お前、赤熊の爲業だあねあの、鍊野郎の。」

「まあ、熊兄さん。」

「止しておくれ」

はた〳〵と袖を拂いて、

「身ぶるひがする。いつが巡査さんの來なすつた朝、覺悟が有つて長棹に掛けてから門傍へも寄せつけない。其を怨んで、未練も有つて、穴から出たり入つたり、此處等つけ廻して居るに違ひない。何の男のやうでも無い。のッそりの蝦夷なんか、

私は何とも思はない。惡く形でも顯はして見たが可い。象牙の撥があるものを、拂き殺しても事は澄む。國手の身のまはりをつけ廻されるんだと、ね、千世ちやんや、姉さんは本當に案じられる。

角の紀田屋まで送つて行つて、車を然う云つて歸して來たがね。獸は驅けるのが疾いやね、車にも乘れば乘るだらう。――泊めたかつたが、お肯きでなし、……」

とお孝は獨言のやうに云つて、

「途中で、又然うでも無い、新聞にお名前の出るやうな事なんぞ無ければ可が、」

と氣を採む頰の後毛は、寢みだれて尙ほ美しい、柳の絲より優しいのである。

「姉さん、」

お千世が顏を覗いて、

「緣起棚へお燈明をあげて、そしてお祈をしませうよ。私も拜むわ。」



「嬉しい娘だね。」

と頰摺したが、襟を合はせて凛として、

「お待ち、私、考へた。……お稻荷樣へお百度を上げやう。」

とて見返る祠は、瓦斯燈の靄を曳いて、空地に蓮の花の紅いが如く、池があるかと浮いて見える。

「數取りにはね。」

と云ふより早く、びり〳〵と比羅紙を引剝がす……

「此を裂いて紙捻にしやうよ、――人を呪はゞ穴二つさ。見たが可い。」

氣の立つたお孝は、褄を引上ぐるより前に、雨霽の露地へ、ぴたと脫いだ、雪の素足。

意氣地も張も葉がくれの闇に、男を思ふあはれさよ。鶴を折る手と、中指に、白

金の白蛇輝く手と、合はせた膝に、三筋五筋覩世捻。柳の絲に、もつれ縺るゝ、皷の緒にも染めてまし。

あはれ、恁る時は、あすの逢瀬を樂みに、歸途を案ずるも心ゆかし、寢られぬ夜半の待人掛ける、小さな犬も拵へ交せて、お千世に背打たせて微笑みもしたが。

柳の葉の散る頃は、……續いて冬枯の二ヶ月、鬢櫛の折れたる時は——

## 一口か一挺か

### 五十三

——「露地の細道駒下駄で。」——

男が口の裡で、フト唄つて、

「不可んぞ、此は心細い。」と、苦笑ひをしながら立直つて、素直に杖を支くと、其ま



ま渡り掛けたのは一石橋。月はないが、秋あかるく、銀河の青い夜の事。其は葛木晋二である。

露地に吾妻下駄カタ〳〵の婀娜な女と因縁のある、唄の意味も心細いが、お孝が投遣りに唄ふのは、勝氣と膽勇を示すものと云つて可い。其の口癖がつひ乘つた男の方は、虚氣と惑溺を顯はすもの、と心着いた苦笑も、大道さなか橋の上。思出し笑と大差は無いので、此は國手我身ながら、(心細い。)に相違ない。

其の虚に憑入る、魔はこんな時に魅す、とある。

今、橋の上を欄干に添つて、日本銀行の方へ半ば渡り掛けると、橋詰の、あの一石餅の、早や門を鎖した軒下に、大な立ん坊の迷兒の如く蹲つて居た男がむら〳〵と立つと、ざわ〳〵と毛の音を立てゝ、鼻息を前にハッハッ獸の呼吸づかひ。葛木の背後に迫つて、のそつと前へ廻ると、兩手を掉つた不器用な、意氣地の無い叩頭

をして、がくりと腰を折つて、
「國手、お願ひ！」
と喘えで云ふ。
はつと一歩あとに退いて、立停まつて、見透して、
「何だ、何ですか。」
彼の影の黒く大なるに對して、葛木の手のカウスは白く、杖は細かつた。
「直訴であります、國手。」
「直訴とは……？」
「直訴とは、……直訴とは、切、切迫詰つたですで、生命がけで、歎願をするです
で。貴方を將軍家だ思うて、橋から青竹を差出します、俺は佐倉宗五ですのだで、
え丶。此の願を聞届け遣はされりや、殺されても、俺、磔に成つても可えのですだ



で。國手。」
「何です。……唐突に、と云ふんだけれども、私はお前さんを知つて居ます。又、
お前さんも知らないとは言はせますまい。そしてお賴みと云ふのは何です。」
「國手、御診察が願ひてえだな。」
と、粗雜に太く云つた。が、口覺えに練習した、腹案の口上が中途で切れて、思
はず地聲を出したらしい。……で、頭を下けて赤熊は橋の上に蹲る。
四五分では、話の皂は着ないと覺つたらう。葛木は卷煙草を點けた。燃えさしの
燐寸をト棄てやうとして水に翳すと、ちら〳〵と流れる水面の、他の點燈に色を分
けて、雛の松明の如く、軸白く桃色に。輝いた時。彼は其處に、姉を思つた。潰島
田の人形を思つた。榮螺と蛤を思つた、吸口の紅を思つて、火を投げるに忍びなく
つて、橋に棄てた。

此と齊しく、どろんとしつゝも血走つた眼を、白目勝に仰向いて、赤熊の筒袖の皮擦れ、毛の落ち、處々、大なる斑をなした蝦蟇の如きものゝ、ぎろ〳〵と睨むを見たのである。

が同時に又、思出の多い此處の賴母しさを感じて、葛木は背後に活路を求めるのを忘れつゝ、橋の欄干に、ひた、と其の背を凭せた。

## 五十四

葛木は從容として云つた。

「お前さん、診察が賴みたい？……然うすりや死んでも可い。そんな解らない謎見たやうな事を言はないで、判然と、石か、瓦か、當つて碎けたら可いぢやないか。私も診察なら病院へ來給へなどゝ廻りくどいことは言はないから。」



「實際、願ひたい次第でして。就てはで、御覽の通り、着のみ着のまゝだ云ふうちにも、擦切れた獸の皮一枚だ、國手。雨露凌ぐ軒はまだしも、堂社の椽の下、石材や、材木と一所にのたつて居る宿なし同然な身の上だで、御挨拶も手續も何も出來ねえですで、其處で以て直訴だでね、生命がけで願えてえだな。」

「本當の診察なら、私は不可い。まるで脈を一つ持つたことの無い、自分の風邪をひいたのには、葛根湯を飲んで、それで治る醫者なんだ。此方も謎のやうなことを云ふんぢやない。事實だよ。診察は、から駄目なんだよ、」

「決して其は脈を取つて貰ふには當らんです。で、唯國手の口一つだなあ。」

「口一つかね。」

「然うですわ。」

「何うするんですか。」

「四の五の無いで、唯一言、(お孝に切れる。)云うて下さりや可いですのだい。」
「大方そんな事だらうと思つたよ、……此の診察は當つたな。」
葛木は莞爾しながら、
「折角だ、が、君、頼まれないよ。」
「何で頼まれん、何で。ありや俺の生命ですが。」
「私の生命かも分らんのだ。」
「俺の女房だ事、知らんのかい。」
「私は藝者だと思つて居るがね。」
「何でも可い。」
ヒドス聲で忙込みながら、
「素張切れてくれ、頼むだでな。」



「女に言へ、女に、……先方が切れゝば其迄よ。人に掛合はれて、自分の情婦を、退くも引くもあるものか。」
「……自分の情婦。……え、堪らん、俺の前でお孝の事を。……うゝ、筋が引釣る身體が震える。
生命とも、女房とも思ふ女を引奪られた戀の敵に、俺の口から切れてくれ頼むと云ふは、これ、よく〳〵の事だ思はんですだか。
女に云うて肯く程なら、遠くから影を見ても、上衣の熊の毛まで矗々立つ、お前んに、誰、誰が頼む、考へんかい。」
「私も同じことを言ひたいな。女が肯かないほどのものを、男が掛合はれて引退る奴がありさうな事だと思ふのかい。」
「俺を人間だと思ふか、國手。」

赤熊はすつくと立つた。
「惡魔だ、鬼だ、狂人だ、虎だ、狼だ。……爲にならんぞ！」
「あゝ、其の上にまだ熊でも可いよ。」
「汝！」
葛木は欄干に杖を倒して、柔に手を拂いた。
「刀物を持つてるか。」
「むゝ、持たんことがあるもんだか。」
「二口あるか、二挺持つてるか。」
「何うするだい。」
「一口渡せ、一挺貸せ。——持たのんのか。一本しかない刀物なら、暗擊にしろ。離れて狙へ。遠くから打て。前に廻つて、名告掛けて、生命の與奪をすると云ふに、



敵の得ものを用意しない奴があるものか、はゝゝゝ、馬鹿だな。」

## 艸冠

### 五十五

「あゝ、言はつしやる。」
赤熊は身構、口吻、さて、急に七つ八つ年を取つたやうに老實に力なく言ふのであつた。
「今言はしやつたは度胸で無いで。膽玉で無いですだ。學問の力だ。國手の見識ですわい。
詫入りますで、はい。
因より將軍樣に直訴する云ふたほどですで、はじめから國手の身體に向うて手を

擧げうとは思はんのですれど、ものは發奮だで、嚇としたでな。そりや刀物措け、棒切一本持たいでも、北海道釧路の荒土を揑ねた腕だで、此の拳一つでな、頭ア胴へ滅込まさうと、……ひよいと抱上げて、ドブンと川に溺める事の造作ないも知つたれども、そりや、あれを見ぬ前だ。

あれよ、……あの、大學校の大教室に、椅子で煙草を飲んでござつた、人間離れのした神々しい豪い處を見ぬ前だで——あれを見た目にや、こんな其の、土龍見たやうに成つて了ふた俺が手で、危いことするは餘り可惜ものだ思ふ氣が、ふいと起つて何うにも出來ねえのですのだで。

其ともに、喃、國手、お前んの生命を搔拂ひさへすりや、お孝との捩が戻つて、早い話が舊々通り言ふことを肯いて、女が自由に成る見込さへあればですだ、それこそ、お前んが國手でも、神でも、佛でも、用捨する氣は微塵も無いだ。



無いだ。が、お前んに逢つて、機嫌の惡い事でもあつた日には、家中に八ッ當りで、十言云ふことに、一口も口を利かぬ。愚に返つた苦勞女を何うするだね。お前んの身に異常がありや、女も一所に死ぬですだらうで、……然うなれば何う成るですだい。

國手、俺は、あの女は生命より大事ですで、死なうにも死に切れん。生きとるにも生きとられん。

國手、顏を見られないくらゐなら、姿だけも見るが可えし、姿さへ見られんなら聲ばかりも聞くが增だし、其の聲さへも聞かれないなら、跫音でも聞いて居たい。其の跫音にすら〳〵と衣服の觸る音でもせうなら、魂に綱をつけて、づる〳〵引摺り引廻はされて、胸を引搔いて、のた打廻るだ。

お前ん、誰も知るまいし、又知らせるやうにもせんですだが、俺はお前ん、二階

から突出されて、お孝の内に出入りが出來なく成つてからは、天に階子掛けるやうに逆せ上つて、極道、滅茶苦茶、死物狂ひで、潰れかけた商會は煙にする、其が爲めに媽々は死ぬ。」

「女房が――死んだ。」と、學士は鋭く口早に言返す。

「二才に成つた小兒は棄てる。」

「……」

「木賃泊りの天井裏に、晝は内に潜つて、夜に成ると、雨でも、風でも、稻葉家の周圍を、胡亂つき廻つて、稻荷さんの空地に蹲んでも居りや、突當りの黒塀に附着いて立明す……然うして聲を聞く、もの音を考へるですだい。

過日來から、隣の家が空いたですで、此の頃では、大概毎晩、あの空屋で寢て居るですだ。」



「空屋でかい。」

と、驚いて云ふ。

「國手、お前んは又毎晩のやうに、蛇が蟠を卷いて居る上で、お孝といちやついてござる勘定だ。

が、俺の方は、おつけ晴れて、許して椽の下へ入れて置いて貰ふ方が、隱忍んで隣の空屋に潜るよりかも希望ですだ。」

襟の邊を引搔くと、爪を嘲へる小供のやうに、含羞む體に、ニヤリとした、が、其のまゝ、何を嚙むか、むしや〳〵と口舐づる。

## 五十六

「尙だ慾の言へば、お前んとお孝と對向で、一猪口飲る處をですだ、敷居の外から

でも可い、見て居たいものですだ。

お孝を俳優で、舞臺だ思へば、何として居られても、顔を見て聲を聞く方が、木戸に立つて考へとるより増だからな。」

俯向いて半ば泣き、

「嫉み猜みは、未だ恁うまで　惚れない内だと考へるで。

初手はね、お前ん、喧嘩した事も、威した事もあるですだい。

現に國手、お前んの大學病院の何とか教室へ俺が推掛けて、偉い人たちに吃驚して遁げて返つた、あの朝ですだ。忘れんですがい。――稲葉家の格子へ巡査が來てお孝にお前んの身の上話いて、――何が嬉しい、……俺は二階で聞いて膽魂が煮くり返るに、きやつ〳〵きやつ〳〵と笑うて、情事の免許狀やうなものを渡いて返つた。お孝が、直ぐに内中の藝者を茶の室へ集めて、ですだ喃、國手。



（私は今日からおかみさん、然う思つて附合つておくれ。其のかはり私も其の氣で附合ふから、借金なんか、まけて欲しい人には直ぐに目の前で帳消しに棒を引きますよ。）――だ、お前ん。

其の勢で二階へ歸つて來ると、未だ顔も洗はんで居る俺を捉まへて、さあ、突然歸つておくれですだ。……藝者なら旦那が有らうが、何が來て居やうが構はない。それが可厭ならお止しだけれど、極つた人が出來た上は、片時も、寢衣で胡坐かいた獸なんぞ、備前燒の置物だつて、身のまはり六尺四方は愚なこと、一つ内へは置けないから、即座歸れ。……云うて生眞西目ですがい。

俺、はじめは笑つたです。が、怒つたですだ。愚痴言ふた。……頼みもしたですのだ。

耳にも入れいで、（汚らはしい、こんな物を。）お前ん、お孝が蒲團を取つて向ふへ

刎ねると、其の時ですわい。豫て國手の事を俺嗅ぎつけて知つとつたで、お孝を威しつけてくれうとな、前の夜さり、懷中に祕いて居つたですれども、顏を見ると、だらけて、はや、腑が拔けて、其のまんま、蒲團の下へ突込んで置いた、白鞘の短刀が轉つて出たですが。

お孝が見たでな。天道時節此處だ思うて、(阿魔覺悟があるぞ！) 睨んだですだ。ばた〳〵とお孝が立つて、占めた、遁げる、恐れたぞ。俺が勝つた、と乘掛つて、階子段の下口で捉まへたは可かつたですれど、何うですかい。

お孝は遁げたで無いですが。……あの階子は取外しが出來るだでね、お孝が自分でドンと突いて、向ふの壁へ階子をば突ぱづしたもんですだ。(短刀をお拔き、さあ、お殺し、殺しやうに註文がある。切つちや不可い、十の字を二つ兩方へ艸冠とやらに曰をかいて。) とお前ん、……葛木と云ふ字に、突いて殺せ。(名まで辛抱は出來



まいが、一字や二字は堪へて見せやう。さあ早く。) と洞爺湖の雪よか眞白な肌を脫いで、背筋のつる〳〵と朝日で溶けて、露の滴りさうな生々とした奴を、水淺黃ちらめかいて、柔りと背向きに突着けたですだで。

豐艶と覗いた乳首が白い蛇の首に見えて、むら〳〵と鱗も透く、あの指の、あの白金が、其のまゝ活きて出たらしいで、俺は此の手足も、胴も、じな〳〵と卷締められると、五臟六腑が蒸上つて、肝まで溶融れて、蕩々に膏切つた身體な、——氣の消えさうな薫の佳い、濕つた暖い霞に、虛空遙かに搖上げられて、天の果に、蛇の目玉の黑金剛石のやうな眞黑な星が見えた、と思ふと、自然に、のさんと、二階から茶の間へ素直、棒立ちに落ちたで、はあ。」

と五十嵐傳吾は腹を搖つて、肩を揉んで、溜息して言ふ。

## 五十七

「其の足で、お前ん、大學に押掛けてからは、御存じの通りだで。

さあ、後の、俺が身體何う成るだね。

天人に雲の上から投落されたも、お前ん、勿體ないだが、乙姫樣に海の底から突出されたも同一ですだ。

又始めに、お孝が俺のものに成つた時は、知つたほどの誰も彼も、不斷云ふ、赤熊だことの、胴胴膳だことの、渾名を止めて、浦島だ、浦島だ、言ふたもんで。俺も日本橋に龍宮が在る、と思ふたですが。其の筈ですだね。鯨に乘つて泳ぎ込む程の不思議で無うて、熊がお孝と對坐に、稻葉屋の長火鉢の前に胡坐組めますかい。



見得は言はねえですぞ。國手の前だ。

死だ媽々は家附きで、俺は北海道へ出稼中、堅氣に見込みを着けられて、中くらゐな身代へ養子に入つた身の上だがね。日の丸の旗を立つて大船一艘、海產物積んで、乘出いて、一花咲かせる目的でな、小舟町へ商會を開いた當座、比羅代りの附合で、客を呼ぶわ、呼ばれもしたので、一座に川岸の人が多かつたでな。土地の藝者も顏が揃ふた。二三度、其の中に、國手、お前んも、因果は遁れぬ、御存じですだ瀧の家の清葉とな、別嬪が居たでねえですか。」

葛木は屹と見る。

「容色は固より、中年增でも生娘のやうな、あの、優しい處へ俺目を着けた。一睨、床の間から睨んだら、否應はあるまい哩。あゝ、爰が俺腦胴膳の悲しさだ。金に成る男のぬくとみにや、誰でも帶を解く、と奥州、雄鹿島の海女も、日本橋の藝者も

同じ女だこ、北海道釧路國の學問だでな。

――吃驚したですだ、お前ん……唯居りや袖も擦合ふけれども、手を出すと、富士の山の天邊あたりまで、スーと雲で退かれたで、あつと云ふと俺、尻持を搗いたですが。

（御守殿め、男を振るなんて生意氣な。可、清葉さんが嫌つた人なら、私が情人にして遣らう。……）

此だで國手。其こそ惡く傍へよると、撥で打たれるぞ、と友達の衆に用心された其のお孝が、俺の手を曳いて抱込んだでな。いや、お孝と來ては、對手の清葉を驚かすためには、裸體で本當の羅にも乘兼ねえですが。――後で聞くと、清葉を口說いて振られたと云ふために、お孝の關係をつけたのが、一人二人でねえと云ふだで喃。」



葛木は聽いて、

「私も御多分には漏れんのだせ。」と、靜に衣兜に手を入れる。

赤熊は星が痛さうに、額を確と兩手で蔽ひ、

「處が、然うで無い。調子が違ふた。……誰も其のかはり、お孝の口から、（可厭に成つたら、其ッ切、御免なんだよ、可かい。）と初手に念を推されて居るで、突出されて謂ふ理窟は無いだね。

そりや、隨分俺が身だけでは金も使つた。けれどもな、鰊や數の子の一庫二庫、あれだけの女に掛けては、吹矢で孔雀だ。富籤だ。マニラの富が當らんとつて、何處へも尻の持つて行きやうは無えのですもの。

が、人情は理窟で無いで。

女房も生命も、其の生命から二番目の一人の小兒を棄てゝまでも……」

「一寸……」
葛木は急に遮りつゝ、
「唯聞いては居られない、……お互に人の兒だよ。お前、小兒を棄了つたと云ふのは？　構ひつけない、打棄つてあると云ふ意味なのかい。」
「然うでねえです。」
「人に遣つたと云ふ事かね。」
「違う。」と、ぶつきらぼうに言ふ。
「棄子をしたか。」
と小さな聲。

## 頭を釘



## 五十八

赤熊は、準弱として、頽然と俯向いたが、太く恥ぢたらしく毛皮の袖を引搜すと何か探り當てた體で、むしやりと嚙む。
葛木は眉を顰めて、
「一寸、小兒も小兒だし、前刻から、氣に成るが、兎に角、色事の達引中だ、なあ、まあ。……それに、那樣事をしてくれては不可いちやないか。見て居られない、……何を食ふんだ。」
「はあ、此かね。」
と、食つた後の指で撮んで、けろりとした顏を上げて、氣も無い樣子で、
「虱だと思つたかね、へゝ、違ふですが。大丈夫だで。國手。脂の拔きやうが足り

んだつた處へ、寢るにも起きるにも脱がねえもんで、こりや、雨な、埃な、日向な、汗な、膏で熊の皮に湧いた蛆だよ。」

「え。」

「蟲ですがい。豪く精分の強い、補劑に成る奴で、喃。」

傳吾は厚ぼつたい口を垂離と開けつゝ、

「此が有るで、俺、此の頃では、一日二日怠けて飯食はねえ事あるですけれども、身體が弱らん。却つて、ほか〳〵溫だね。取つちや食ひ、取つちや食ひするだ。が、あとから〳〵湧くです哩。二十間の毛皮を縫包みにして居るで、形のある中は蟲が湧くですだ。」

葛木は面を背けて、はつと吐かうとした唾を、清葉の口紅と、雛の思出、控へて半帕を口に當てた。



——やがて、お孝が狂氣に成つたも、一つは此の蟲が因である——

## 五十九

「貴下、何をして居らるゝかね。」

靴を忍んで唐突に、づか〳〵と寄つて聲を沈めたのは巡査であつた。

「一寸談話を。」

葛木は爾時まで、蟲に背けた面を向ける。と、星に照らして、

「や、國手ですか。」

「お、、貴官で。」

「此の橋は妙な橋ですな。」

と茫爾しながら、角燈を衝と向ける。其處に背後むきに蹲んだ奴。

「此方は、」
「舊友です。ふと此處で出會つたんです。」
「お話しなさい……失禮しました。」
「あゝ、貴官、いつぞやは――一度、更めてお目に掛りたいと思つて居ます。」
「難有う。機會を待ちます。」
と銀河を仰ぎ、佩劍の秋蕭殺として、鵲の如く黑く行く。橋冷やかに、水が白い。
「夜が更ける……おい、そして、そして小兒は。」
「國手、臟腑から餌を吐くまで何事も打まけたで、小兒を棄てた處を言ふですれど、此だけは內分に願ひたいでね、極ねえ。……巡査にでも知れると成らんですだ。」
「餘り、巡査に遠慮する風でもあるまいぢやないか。」
「然うでねえです。川岸の腸拾ひや、立ん坊は大事無いですれど、棄子が分ると引



つばられるでね、獄へ入れられる。其も可えですが、唯、然う成ると、椽の下からも、お孝の聲が聞かれんですだよ。」
葛木は思はず吐息した。
「無論言ひはせん。」
「なら話すだがね、小兒を棄てたのは、清葉の門だで。」
「何、清葉の。ぢや、あの瀧の家で拾つて、可愛がつてると云ふ小兒は、お前のかい。」
「小兒は幸福ですだ。」
「むゝ、幸福だ。」
と引入れられて、氣を取られた調子が高く、
「清葉が、頰摺りしたり、額を吸つたり、……抱いて寢るさうだ。お前、女房は美し

かつたか、綺麗な兒だつて。あゝ、幸福な兒だ。可羨しいほど幸福だ。」

摺つて出るやうに水を覗く、と風が冷かに面を打つ。欄干に確と兩手を掛けた、が、熟と默つて、やがて靜に立直つた時、醉覺の顏は蒼白い。

「私は馬鹿だよ。……もし私を、假にお前の境遇に置いたとすると、其のくらゐな知慧も分別も決して無いのだ。お前は私より知識がある、果斷がある、……飯のかはりに、羆の毛の蟲を食つても、其れほど知慧があり、果斷もあれば、話は分らう。

大分遲い、……今度の巡査は此のまゝには通らんぞ。さあ、早い處を言へ。

お前の要求は肯入れられない、二人は斷じて緣を切らない……」

牛ば聞いて赤熊は又頽然とした。

「然う言つたら、お前は何うする、私を殺すか。」

「……」



「お孝を殺すか。」

「えゝ、あれが殺せますほどならですだ、お前んに、手向ひするだい。殺したい、殺したい、殺して死にたい思うても、傍へ行きや、ぽつと佳い香のするばかりで、筋も骨も萎々と、身體がはや、濕つた粘のやうに成りますだで。」

「チョッ、確乎しないのか。お孝に手出しが出來なかつたら、初めて私を殺す、私を狙ふ計畫を立てゝくれ。勇氣を起せ。張合を着けろ。私が賴む。そして私にお前の言分を刻ねつけさせてくれないか。私も賴む、其の樣子ぢや靄を引摑んで突返すやうで、斷るに斷り切れない。……こんな弱つた事は無いのだ。

おい、男がものを言掛けるには、若しそれが肯入れなかつたら何うする、と覺悟を極めてかゝるのが法だ。……恥を知れ。恥を知れ。氣を判然して出直して、切物か、刀物の齒ごたへのあるやうにして、私に斷然、（女と切れない。）と言はしてく

れ。」

葛木が焦れて氣色ともに激しく成るほど、はあ〳〵と呼吸を内に引いて、大息で喘いだが、獸の背の、波打つ體に、くな〳〵と成ると、とんと橋の上へ、眞俯向けに突伏して了ふ。

「お願ひですだ、拜むですだい。……邪魔だらば、緣の下へ突込まれうで。柱へうしろ手に縛られて居ながらでも、お孝の顏を見て居たいで、便所の掃除でも何でもするだ。……活動寫眞で見たですが、西洋は羨しい。女の足を舐めるだあもの。犬に成つても大事ねえだで、香が嗅ぎたい、顏が見たいで、此の通り拜むだ、國手。恥も、外聞も、お孝があつての上ですだよ。」

わつと云ふと、聲を上げて、ひく〳〵後を引いて泣く。

葛木は踵を刻んで、



「聞げ、聞け。だが何にも言ふことが出來ない。……では、お前、私がきれゝば、お孝は確にお前に戻るか、其の、お前に、お孝が戻ると思ふのかよ。」

「そりや、そりや戻つても戻らいでも、國手があるより增だでね、聲だけ聞くでも姿だけ見るでも、國手と二人の時と、お孝一人の時とでは、俺が心持が何う違ふか考へずとも分るだでね。拜むですだよ。何も言はんで。……此、此、此の橋板に摺着けて血を出いて願ひたいごも、額の厚ぼつたい事だけが、我が身で分る外何にも分らん。血の出ないのが口惜いですだ。」と頭を釘に、線路の露の鐵を敲く。

學士はフイと居なく成つた。銀河のあたり、星が流るゝ。

## 六十

はッと聲に出して、思はず歎息をすると、滲む涙を、兩の腕。……面を斜と蔽うて居た。

車の上で――もう夜半二時過。

此の辻車が、西川岸へヌッと出たと思ふと、

「あゝ。」

葛木は慌しく聲を掛けた。

「一寸待て、車夫。」

「へい〳〵。」



「忘れものをして來た、歸つてくれないか。」

「唯今、乘した處へ。」

「あゝ。」

夜延仕でも、達者な車夫で、一もん字に其の引返す時は、葛木は伏せた面を擧げて、肩を聳かす如く痩せた腕を組みながら、切に飛ぶ星を仰いだ。が、夜露に、痛いほど濡れたかして、顏の色の眞蒼であつた。

「可、此處で――此處で――此處で――」

と焦つて、壓へて云ひ〳〵、早や飛下りさうにしつゝも驅戻る發奮みにづか〳〵と引摺られるやうに町の角を曲つて、漸と下立つた處は、最う火の番を過ぎて、お竹藏の前であつた。

直ぐに稻葉家の露地を、ものに襲はれた體に、慌しく、其の癖、靴を浮かして、

跫音を密めて、した〳〵と入ると、門へ行つた身を靡して、柳を透かしながら、聲を忍んで、二階を呼んだ。

「お孝さん、……』

寂然として居たが、重ねて呼ぶのに氣を兼ねる間も無く、雨戸が一枚、すつと開いて、下から映す蒼い瓦斯を、逆に細流を浴びた如く濡萎れた姿で、水際を立てゝ、其處へお孝が、露の垂りさうに艶麗に顯はれた。

が、其は浴びるばかりの涙なのである。

唯、見る時、葛木も面にはら〳〵と柳の雫が、抑へあへず散亂るゝ。

今宵は三度目である。宵に來て、例の如く川岸まで送られて十二時過に歸つた時は、夢にも恁うとは知らなかつた。——一石橋で赤熊に逢つて、浮世を思捨てるばかり、覺悟して取つて返した時は、もう世間も此處も寢靜まつて居た上に、お孝は



疲れた、そして醉つても居た。……途中送る折も、送る女が、送らるゝ男の肩に、なよ〳〵と顏を持たせて、

「邪慳だね、歸るなんて。」

ぐつすり寢込んだに相違ない。えゝ、決心は鈍らうとも、まゝよ、此の次に、と一度引返さうとして、たゞ、口ずさみのひとりでに、思はず、

「お孝……」

と呼ぶと、

「あい。」と聲の下で返事して、階子を下りるのがトン〳〵と引摺るばかり。日本の眞中に一人、此の女が、と葛木は胸が切つたのであつたが。

暖い閨も、石の如く、砥の如く、冷たく堅く代るまで、身を冷して涙で別れて……

三たび取つて返したのが此時である。

お孝は、亂書の假名に靡く秋風の夜更けの柳にのみに、ものを言はせて、瞳も頬も玉を洗つたやうに、よろ〳〵と唯俯向いて見た。

「濟まないがね、――人形を忘れたから。」

「はい。」

と清く潔い返事とゝもに、すつと入ると、向直つて出た。乳の下を裂たか、とハツと思ふ、鮮血を滴らすばかり胸に据ゑたは、宵に着て寢た、緋の長襦袢に、葛木が姉の記念の、あの人形を包んだのである。

ト片手ついたが、欄干に、雪の輝く美しい白い蛇の絡んだ俤。

「お怪我の無いよう……御機嫌よう。」

とはらりと落すと、袖で受けたが、さらりと音して、縮緬の緋のしぼは、鱗が鳴るか、と地に辷つて、潰島田の人形は、二片三片花を散らして、枝も折れず、柳の葉



末に手を留まんぬ。

「清葉さん、――然やうなら。」

カタリと一巾、黒雲の鎖したやうな雨戸が締つて、……

――露地の細路、駒下駄で――

と裏悲しいが。冴ゑた聲。鈴を振る如く、白銀の、あの光、あけの明星か、星に響く。

葛木は五體が窘むだ。

稲荷堂の、背裏から、もぞ〳〵と這出して、落ちた長襦袢に掛つて、兩手に掴んだ、葛木を仰ぎ見て、夥多たび押頂いたのは赤熊である。

車夫の提灯が露地口を、薄黄色に覗くに引かれて、葛木はつか〳〵と出て、蹣然と乘ると、楫を上る。背に重量が掛つて、前へ突伏すが如く、胸に抱いた人形の顔

を熟と視た。

## 彗星

### 六十一

其の翌年の春である。日本橋三丁目の通の角で、電車の印を結むで、小兒演技の忠臣義士を煙に卷いて、姿を消した旅僧が、胸に掛けた箱の中には、同じ島田の人形が入つて居たのである。

生理學教室一三昧の學士も、一年ばかりお孝に馴染んで、其の仕込みで、一寸大高源吾ぐらゐは玩ぶことが出來たのである。

却説、葛木法師の旅僧は、遠くも行かず、何處で電車を下りて迂廻したか、多時すると西川岸へ、船から上つた如く瓢然として顯はれて、延命地藏尊の御堂に詣でゝ



禮拜して、飲酒家の伯父さんに叱られたやうな形で、あの賓頭盧の前に立つて、葉山繁山、繁きが中に、分けのぼる峯の、月と花。清葉とお孝の名を記にした納手拭の、一つは白く、一つは青く、春風ながら秋の野に葛の裏葉の飜る、寂しき色に出でゝ戰ぐを見つゝ、去るに忍びぬ風情であつた。

茶を振舞つた世話人の問に答へて、法體は去年の大晦日からだ、と洒落で無く眞顏で云ふやう、

「いや、夜遁げ同然な俄發心。必よりか形だけを代へました青道心でございます。面目の無い男ですから笠は御免を蒙ります。……何處と申して行く處に當は無いので、法衣を着て草鞋を穿くと、直ぐに兩國から江戸を離れて、安房上總を諸所經歷りました。……今日は、藥研堀を通つて此方へ。——今度は日本橋を振出しに、徒歩で東海道に向ひますつもり。——以來は知らず、何處へ參つても、此のあた

りぐらゐ、名所古蹟はございませんな。」

と云つて、ほろりとして、手を擧げて茶盌を頂いて出て行く。

人足繁き夕暮の川岸を、影のやうに、すた〳〵と拔けて、それからなぞへに橋に成る、向つて取着の袂の、一石餅とある淺黄染の暖簾を潜つて、土間の緣臺の薄暗い處で、折敷裝の赤飯を一盆だけ。

其癖、新しい銀貨で釣錢を取つて一石橋へ出た。もう日が暮れたのである。

半ば渡つた處、御城に向いた、欄干に、松を遠く、船を近く彳んで、凭掛つたが熟として頰杖を支いて、人の往來も世を隔てた如く、我を忘れた體であつた。

「然やうなら。」

と一言掛けて、發奮むでかりに身を飜すと、其處へ、ヅンと來た電車が一輛。目前へカラ〳〵と打つかりさうなのに、あとしざりに壓され、壓され、煽られ氣味に



蹌踉々々と成つた途端である。

「火事だ、火事だ。」

把手を控へて、反身に成つた車掌が言つた。其の帽の、廂も顏も眞赤である。

黑い水の、箱を溢るゝばかり、乘客は總立ちに硝子に犇めく。

驚いて法師が、笠に手を掛け、振返ると、龜甲形に空を劃つた、都會を裝ふ、鎧の如き屋根を貫いて、檜物町の空に燦と立つ、偉大なる彗星の如き火の柱が上つて、倒に迸る。

「瀧の家だい。」

其の見當とも言はず、……殆ど直覺的に、清葉の家を、耳の傍で叫んで、――

前刻から橋の際に腰を板に着いて蹲んで居た、土方體の大男の、電車も橋も搔退けるが如く、兩手を振つて駈出したのがある。

旅僧は、其の聲を、聞いたやうだ、と思つたらう。しかし其の時、羆の皮は着て居なかつた。

此は、清葉とお千世が、此の日、稲葉家へ入らうとして、其の露地から出て、二人を見て逃げるのを知つた、のッそり頬被をした畫の影法師と同じ風體の男である。

## 綺麗な花

### 六十二

「危えッ！」

危え、と藏の屋根から、結束した消防夫が一人、棟はづれに乘出すやうにして、四番組の纏を片手に絶叫する。

其の下に、前と後を、おなじ消防夫に遮られつゝ、口紅の色も白きまで顔色をか



へながら、かゝげた片褄、跳足のまゝ、宙へ乘つて、前へ出やうと身をあせるのは清葉であつた。

「放して、放して。」

此の土藏一つ、細い横町の表から引込むだ處に、不思議なばかり、白磨の千本格子がぴたりと閉つて、寢靜つたやうに音もしないで、たゞ軒に掛けた瀧の家の磨硝子の燈ばかり、瓦斯の音が轟々と、物凄い音を立てた。

「藏は大丈夫だ。姉さん、危い。」と又屋根から呼ばゝる。

取卷く、人數が、

「退いた、退いた、退いた。」と叫ぶ。

薄藤色の出の衣服の、肩を揉んで身をあせる、火の粉は紅梅の如く衣紋を切つて散るのである。

「藏ぢやない、藏の事なんかぢやないんだよ。」
「簞笥は出したい。出來るだけ出した。」
「内の人たち。」と、清葉は最う聲が涸れる。
「乳母は、湯に入つて居た處だ、裸體で遁げた。」
「娘さんも小婢も遁がした。下女どんは一所に手傳つた。」
「何しろ火が疾い。然も火元が裏家の二階だ。」
と口々にがや〳〵言ふ。
「其の二階におつかさんが。」
「何、阿母が。」
「坊やが、坊やが。放して、放して。」
と云ふと、思はず壓へたのが手を放す。



「了つた。」と屋根で喚く。
二人ばかりドンと出て格子戸に立つたのは、飛込まうとしたのでは無い、血迷ふばかりの、清葉を遮つて、突戻すためであつた。
清葉は、向ふから突戻されてよろ〳〵と、退ると、喞筒の護謨管に裳を取られてばつたり膝を、其の消えさうな雪の頸へ、火の粉がばら〳〵とかゝるので、一人が水びたしの半纏を脱いで掛けた。
此の折から、此處の横町を川岸へ出る、角の電信柱の根を攀ぢて、其處に積んだ材木の上へ、すつくと立つて顯はれた、旅僧の檜木笠は、兩側の屋根より高く、小山の如き松明の炎に照らされたが、群集の肩を踏まないでは、水管の通つた他に、一足も踏込む隙間は無かつたのである。
「筒先ウ向けろ。」

「手向の水だい。」

其處に絶望の聲を放つと、二條ばかり、筒尖を格子に向けた。

どどどッと鳴る音と共に、軒の瓦斯は、人魂の如く屋根へ飛ぶ。格子が前へどんと倒れる、地獄の口の開いた中から、水と炎の渦卷を浴びて、黒煙を空腔に踏んで火の粉を泳いで、背には清葉の繼しい母を、胸には捨てた（坊や。）の我兒を、大肌脱の胴中へ、お孝が……葛木に人形を包んで投げたを拾つて持つた、緋の長襦袢を縄からげにぐい、と結んで、

「おう！」

とばかり呻つて出たのは赤熊である。

「助かつた。」

「助けた。」



錦の帶は煙を拂つて、龍の如く素直に立つ。母は其の手に抱寄せられた。

「坊や。」

と清葉が手を伸ばした時、炎の流は格子戸の倒れた穴を、堰を切つた堤の如く、九ツの頭を立てゝ漲り流るゝ。

「まあ、綺麗に花が咲いた事。」

一町、中を置いた稻葉家の二階の欄に、お孝は、段鹿子の麻の葉の、膝もしどけなく頰杖して、宵暗の顔ほの白う、柳涼しく、此の火の手を視めて居た。……

## 振向く處を

### 六十三

「此の勢だ、此の勢だ。」

人雪頽打つ中を、まるで夢中で、

「人一人助けたゞい。此の勢なら殺せるだい。お孝、畜生。」

眼は火の如く血走ながら、厚い唇は泥の如く締なく緩んで、ニタ〳〵と笑び乍ら足計ふら〳〵と虚空を睨んで、夜具包み背負つてト轉倒がる女を踏跨ぎ、硝子戸を立てゝ飛ぶ男を突飛ばして、ばた〳〵と破つて通る。

「此の勢だい、殺せるだい。」

火の盛なる頃なれば、大膚脱ぎを誰一人目に留る者も無く、のさ〳〵と蓦の歩行みに一町隣りの元大工町へ、づゝと入ると、火の番小屋が、あつけに取られた體に口を開けてポカンとして、散敷いた櫻の路を、人の影は流るゝやう。……半鐘の響太鼓の音、ぱつ〳〵と燃ゆる音、べらべらと煙の響、もの音ばかり凄じく、兩側の家は唯、黒い墓の如く、寂しいまでにひそまり返つて、唯處々、廂に眞赤な影は、



其處へ火を呼ぶか、と凄いのである。

洪と鳴つて新しい火の手が上ると、魔が知らすやうな激しい人聲。わッと喚いて此の町も危く成つたが、片側の二階からドシ〳〵投出す。衣類、調度。

ト諸君はお竹藏と云ふのを御存じの筈と思ふ。あの屋根から、誰れが投げて、何のがらくたに交つたか、二尺ばかりの蠟鞘が一口。蛇の如く空に躍つて、丁ど其處へ來た、赤熊の額を尾でたゝいて、ハタと落ちた。

發奮で打つたか。前刻瀧の家の一階で受けた怪我の、氣の勢で留まつて居たか。此の時、額から垂々と血が流れたが、其には構はないで、殆ど本能的に、胸へ抱いた年弱の三歳の子を兩手で抱へた。

が、慌しく刀を拾ふと、何を思ふ隙も無さゝうに、ギラリと冷かに拔いて、鞘を棄てゝ提げたのである。

其のまゝ襲人つた、向ふの露地口には、八九人立したが、眞中をづゝと通るのに、誰も咎めたものが無い。

柳に片手を、柄下りに、拔刀を刀尖上りに背に隱して、腰をづいと仲して、木戸口から格子を透かすと、丁ど梯子段を錦繪の拔出したやうに下りて、今、長火鉢の處に背後向きに、すつと立つた、段染の麻の葉鹿の子の長襦袢ばかりの姿がある。

がらり開けると、づか〳〵と入るが否や、

「畜生。」

振向く處を一刀、向ふづきに、グサと突いたが脇腹で、アッと殆ど無意識に手で疵を壓へざまに、弱腰を横に落す處を、引なぐりに倚う一刀、肩さきをかッと當てた、が、それは引かき疵に過ぎなかつた。刀物の鍛は生鐵で、刀は一度で、中じやくれに曲つたのである。



「姉さん——」

●蟲が知らしたか、もう一度、

「お爺さん。」と呼ぶと齊しく、立つて逃げもあへず、眞白な腕をあはれ、嬰兒のやうに虛空に投げて、身を悶えたのは、お千世ではないか。

赤熊は今日も附狙つて、清葉が下に着た段鹿子を目的に刀を當てた。

このお千世の着て居たのは、しかし其では無く、……清葉が自分のを持たして寄越したのであることを、此處で言ひたい。

「一寸、お茶を頂きに。」——

清葉の眉の上つたのを見て、茶の鑵をたゝく叔母なるものは、香煎でもてなすこ

とも出來ないで、陰氣な茶の間が白けたのであつたが。

## あはせかゞみ

### 六十四

「これは、入らつしやいまし。」

其處へ、お千世に介抱されつゝ、二階から下りて來たお孝が、儀式正しく、びたりと手を支いて挨拶をした。肩の位に、大客を恐れない品格が備はつて、取亂した人とは思はれなかつた、が、清葉も改めて會釋をする時、其は誰にするのやら分らないことを悟つた。

「入らつしやいまし。」

今度は澄まして在らぬ方の、店を向いて手を支たのである。



「お孝さん、分りますか。」

清葉は聲を曇らしながら、二階で弄んで欄干越、柳がくれに落したのを、袖で受けて膝に持つた、銀地の舞扇を開いて立つて、長火鉢の向ふ正面に緣起棚の前にきらりと翳すと、お孝が、肩を落して、仰向いて見つゝ、

「お月樣でせう。——大事のお月樣雲めがかくす。——とても隱すなら金屏風で、」

と唄ふかと思へば、

「おゝ、寒い、おゝ寒い、もう寢やうよ。」と身ぶるひをする。

お千世が、其の膝を抱くやうに附添つて、はだけて、乳のすくお孝の襟を、搔合はせ、搔合はせするのを見て、清葉は坐にも着きあへず、扇子で顏を隱して泣いた。

背後へ廻つて、肩を抱いて、

「お大事になさいよ、靜にお寢みなさいまし、お孝さん、一寸お千世さんを借りま

すよ。――――お座敷にして。」

と顧みて、あとは阿婆に云つた。

「から、意氣地も、だらしも有りませんやね、我まゝの罰だ、業だ。」

と時々刻んで呟いた阿婆が、お座敷と聞くと笑傾け、

「そらよ、お千世や、天から降つたやうな口が掛つた。さあ、着換へて、」

直ぐに連れて出ると心得た阿婆が、他には無い、お孝の亂心にゆかしがつて着て居た、其の段鹿子を脱がせやうと、お千世が遮る手を拂つて、いきなりお孝の帶に手を掛けて、かなぐり取らうと爲たのである。

「叔母さん、まあ、」

とお千世はおろ〳〵。……

「失禮をいたします。」と、何の事やら又慇懃に、お孝が、清葉に手を支いたのは涙



ならずや。

「これが可厭なら、よく稼いで、可い旦那を取つてな、貴女方を、」

と、清葉を顧、

「見習つて幾枚でも拵へろ、其處を退かぬかい。」と突退ける。

「お待ちなさいまし、」

凛と留めて、

「切火を打つて、座敷へ出ます、藝者の衣物を着せるには作法があるんです。……お素人方には分りません、手が違ふと怪我をします。貴方、お控へなさいまし。――千世ちやん、今、(箱さん。)を寄越すから、着換へないで入らしやいよ。――姉さんを氣をつけて。お孝さん、」

何も知らず横を向いたお孝に、端正と手を支いて、

「然やうなら。――――二人で、一度あはせたものをしませうね。」

と目を半帕で押へて歸つた。……

襦袢は故と、層馴れたけれど、同一其の段鹿子を、別に一組、縞物だつたが對に揃へて、其は小女が定紋の藤の葉の風呂敷で屆けて來た。

箱屋が來て、薄べりに、紅裏香ふ、衣紋を揃へて、長襦袢で立つた、お千世のうしろへ、と構へた時が、摺半鐘で。

「木の臭がしますせ、近い。」

と云ふと、箱三の喜平はぴよいと一飛。阿婆も續いて驅出した。

お千世の斬られた時、衣物は其處に其のまゝである。

振袖





「違つた、お千世だい。」

と、矢張りニタ〳〵と笑ひながら、目を据ゑて階子壇を見上げた時。――あゝ、一足遲矣。

お千世の祖父の甚平が臺所口から草鞋穿の土足である。――此が玄關口から入つたら、或は恁うは無かつたらう。――――爺さんは、當夜植木店のお藥師樣の緣日に出た序に、孫が好きだ、と草餅の風呂敷包みを首に背負つて、病中ながら豫て抱主のお孝が好いた、雛芥子の早咲、念入に土鉢ながら育てたのを丁寧に兩手に抱いて、來て、途中頭の上の火事に慌てながら、驚破や見舞、と驅込んで臺所口へ廻つたのが、赤熊と一足違ひ。

泥鉢は一堪りも無く踏潰された、恰も甚平の魂の如くに挫けて、眞紅の雛芥子は處女の血の如く、めら〳〵と颯と散る。

熊は山へ歸る體に、のさ〳〵と格子を出た。

ト、敵を追つて捕へやう擬勢も無く、お千世を抱いて、爺さんの腰を拔いた、其の時、山鳥の翼を弓に番へて射る如く、颯と裳を曳いて、お孝が矢のやうに二階を下りると思ふと、

「熊の蛆め、畜生。」と追縋つて衝と露地を出た。

が、矢玉と馳違ひ折かさなる、人混雜の町へ出る。と何しに來たか忘れたらしく、こゝに降かゝる雨の如き火の粉の中。袖でうけつゝ、手で招きつゝ、

「花が散るよ、散るよ。」

と蹴出しの淺黄を蹈ぐゝみ、其の紅を捌きながら、づる〳〵と着衣を曳いて、



「おゝ、冷い、おゝ、冷い。……雪やこんこ、霰やこんこ。……おゝ綺麗だ。花が散るよ、花が散るよ。」

仲通の小紅屋の小僧は、張子の木兎の如く、目を光らして一すくみに成つた。

火の影ならず、血だらけの拔刀を提げた、半裸體の大漢が、戸惑した幟の繪に似て、店頭へすつくと立つと、會釋も無く、持つた白刃を取直して、切尖で、づぶりと其處にあつた林檎を突刺し、敵將の首を擧げたる如く、づい、と揭げて、風車でも廻す氣か、肌につけた小兒の上で、くるり〳〵とかざして見せたが、

「あはゝ。」と笑ふと、ドシンと緣臺へ腰を掛ける、と風に落ちて來る燃えさしが人よりも多い火の下の店頭で、澄まして林檎の皮を剝きはじめた。

小僧は土間の隅に宛然のからくり。お世辭ものゝ女房が居たらば何と云はう。其は見えぬ。

「坊主、咽喉が乾いたらうで、水のかはりに、好なものを遣るぞ。お丶、女房に肖如だい。」

ニヤ〳〵と又笑つたが、胡瓜の化けたらしい曲つた刀が、剝きづらかつたか、あはれ血狂つて、足で白刃を、土間へ壓當て、蹈延ばして、反を直して、瞳に照らして持直す。目の前へ、すつと來て立つたのはお孝である。

「刀をお貸し。」

默つて袖口を、なぞへに出した手に、はつと、女神の命に從ふ狀に、赤熊は默つて其の刀を渡した。

「お丶、嬉しい、刺刀一挺持たせなかつた。」

と、手遊物のやうに二つ三つ、睫を放して、ひら〳〵と振つた。

眦を返す、と亂る丶黑髪。



「覺悟をおし。」と、澄まして一言。

何か言ひさうにした口の、唯またニヤ〳〵と成つて、大な涎の滴々と垂る丶中へ素直にづきんと刺した、が、齒にカツと辷つて、唇を決明果の如く裂きながら、咽喉へはづれる、其の眞中、我と我が手に赤熊が兩手に握つて、

「う丶、う丶！……抉れ、抉れ、抉れ。」

懷中をころがる小兒より前に、小僧はべた〳〵と土間を這ふ。

「了つた。」

手を壓へたのは旅僧である。葛木は、人に揉まれて、脫け落ちた笠のかはりに、法衣の片袖頭巾めいて面を包むだ。

「お孝さん。」

「先生。」

と、忘れたやうに柄を離すと、刀は落ちて、赤熊は眞仰向けに、腹を露骨に、のつと反る。

お孝の彼を抉つた手は、こゝに唯天地一つ、白き蛇の如く美しく、葛木の腕に絡つて、潛々と泣く。

葛木は尙ほ縋る袖をお孝に預けたまゝ、跪いて悶絶した小兒を抱いた。

驅着けた警官の中に笠原信八郎氏が有つた。

「葛木……更めてお目にかゝります。……見苦しくなく仕度をさせます。此女の內までお見免しが願ひたい。」

「諸君。」

信八郎氏は言下に云つた。

「私が責を負ひます。」



警官は二隊に分れた。

お孝は法衣の葛木に手を曳かれて、靜々と火事場を通つた。裂けた袂も、宛然振袖を着た如くであつた。

火の番の曲り角で、坊やに憧がれて來た清葉に逢つた。

「あゝ、お地藏樣。」

夢かとばかり、旅僧の手から、坊やを抱取つた清葉は、一度繼母とゝもに立退いて出直したので、凛々しく腰帶で端折つて居た。

お孝は、離さじ、と唯默つて葛木に縋る。

「や、此處にも一人。」

警官は驚いた。露地の出口の溝の中、さして深くも無い中に、横倒れに陷つて死んで居たのは茶罐婆で、胸に突疵がある。偖は赤熊が片附けた。

此が爲に、護送の警官の足が留まつて、お孝は旅僧と二人、可懷しさうに、葉が差覗く柳の下の我家に歸る。

清葉の途中で立停まつたのを見て、お孝が判然した聲で云つた。

「姉さん、遺言を聞いて下さい。」

「はい。」

と答へた。二人は柳の軒燈に。清葉は其時、羽目について暗く立つた。

「お孝さん、藏も今しがた落ちました。」

と云つて、實際目ぬりが屆かないで、助つたつもりの藏、中には能衣裝まである

と傳へた、が開いたのであつた。

坊やを胸に、すつと出て、

「身に代へまして、清葉が、貴女に成りかはつて。」



其時三人が皆泣いた。

「お千世さんは、」

「あゝ、お千世。」

餘りの事に呆果てゝ、三人は茫然とした。中にも族僧は何をトッチたか、膝で這廻つて、雛芥子の散つた花片の、煽で動くのを、美しい魂を散らすまいとか。胸の箱へ、拾ひ込み拾ひ込みしたのである。

信八郎氏が先づ一人で入つて來た。

お孝は胸に抱いて仰向けに接吻して居た、自分のよりは色のまだ濡々と紅な、お千世の唇を放して、

「お湯を頂きましても可うございますか、旦那。」

と信八郎氏に手をついて言ふ。

渠は擧手の禮を返して、
「御隨意に、盃をなすつて可い。」
茶棚に背後向きに成つた肩を拊つばかり、ハタと其處へ、緣起棚から輝いて落ちたのは、清葉が、前に翳したまゝ其處にさし置いた舞扇で。
ふと此に心着いたらしく、立つて頂いて、同じ緣起棚から取つた小さな紙包み、(同妻。)の手帕の端を、湯呑に落して素湯を注いだ、が、何にも言はず、かぶりと呑むと、茶碗酒が得意の意氣や、吻と小さな息をした。其の中に黑子を拔いた時の硝酸が入つて居た。
「姉さん、遺言を聞いて下さいな。」
「生命に掛けます、お孝さん。」
其時舞扇を開いた面は、銀よりも白ずんだ。



お千世は玉の緒を繫ぎとめた。
葛木が、生理學教室に歸つたのは言ふまでもない。留學して當時獨逸にあり。
瀧の家は、建つれば建てられた家を、故と稻葉家のあとに引移つた。一家の美人十三人。
清葉が盃を擧げて唄ふ、あれ聞け横笛を。
——露地の細路駒下駄で——

——完。)

大正七年六月三日印刷
大正七年六月六日發行

日本橋

定價金九拾五錢

著作者　泉鏡太郎
發行者　東京市日本橋區通四丁目五番地　和田利彥
印刷者　東京市京橋區築地二丁目三十番地　川崎佐吉
印刷所　東京市京橋區築地二丁目三十番地　川崎印刷所

著者檢印

發行所　日本橋通四丁目　春陽堂　電話五十一番　振替一六一七

□泉鏡花氏作□

## 由緣文庫

▼▼羽二重表紙
一圓六十錢
送料八錢

（内容）

□梟物語　□月夜遊女
□龍潭譚　□風流
□印度更紗卷　□浮舟
□櫛　□霰降る
□不知火　□貝殼
□夕顔
□櫻
□白金之繪圖
□柏奇譚
□銀短冊

## 鏡花選集

▼▼羽二重表紙
一圓六十錢
送料八錢

（内容）

□湯島詣　□婦系圖上卷
□通夜物語　□婦系圖下卷

## 遊里集

▼▼羽二重表紙
一圓六十錢
送料八錢

（内容）

□白鼠　□第一蒐藪本
□紫手綱　□第二蒐藪本
□糸遊　□三尺角帶
□葛飾砂子　□夜叉
□義巳巷談　□南地心中

鏡花氏の作品の、我が文壇に於ける特種の位置に就ては、吾等の多く云ふを俟たざる處、實に後來の日本文學史を飾るべき雄にして珍なる藝術である。

「由緣文庫」以下三集はいづれも任俠を經とし、戀を緯とせる錦篇にして、實に江戸情調の結晶なり。戀に生き戀に死ぬる、歡樂の血涙を以て充されたる傑作の堆集なり。粹艶なる雪岱氏の裝幀は、よく内容と相俟つて所謂縮刷本の俗悪を脱せるもの。

377
71

終